2009 年 4 月 22 日放送

漢方医人列伝「曲直瀬道三」

二松学舎大学　東アジア学総合研究所　准教授　　町　泉寿郎

曲直瀬道三は、永正４年（西暦１５０７）９月１８日に、京都上京柳原に生まれました。母はお産がもとで間もなく亡くなり、父もこの年に亡くなり、姉と伯母に養育されました。初め京都五山の相国寺で学問を学び、２２歳の時、関東の足利学校に遊学して学問を深め、更に導道や田代三喜といった関東の名医に医学を学び、３９歳で京都に戻って医業を開業しまた塾を開いて医学を講義しました。医者としての名声は並ぶものが無く、正親町天皇や毛利元就・足利義昭・松永久秀らを診察・治療し、織田信長・豊臣秀吉からも厚遇をうけました。卓越した臨床家であっただけでなく、多くの著述を著して高度で体系的な医学をうちたて、また医学教育に力を注いで門下に優秀な後継者を輩出し、更に庶民救済にも尽くし、文禄３年（１５９４、一説に１５９５とも）１月４日に８８歳で亡くなりました。

業績：

曲直瀬道三が活躍した１６世紀になると、それまで貴族・寺院が占有した「書籍文化」が新しく興ってきた世俗界に流出するようになりました。医学もその例外ではありません。ただし道三の生きた時代は、まだ出版文化が日本に定着していなかったため、書籍といえば平安・鎌倉の古い時代から伝わった写本か、中国や朝鮮から輸入された漢籍が殆どでし

た。そうした中にあって道三は、当時最新の明・嘉靖年間（西暦１５２１-１５６６）に出版された医書、中でも特に朱丹渓学派の書籍を重視し、それらを幅広く吸収して、旧来からの宮廷医や中国に渡った僧侶らが担った医学から更に一歩進め、江戸時代へとつながる新しい医学の基盤を確立しました。道三は、宋・金・元・明に新たな展開を遂げた中国医学の知識を、いわゆる「察証弁治」と呼ばれる独自の医学理論によって体系化し、多くの著作を著しました。こうした道三の医学は、江戸時代中期に『傷寒論』の処方に基づく治療を主張した人々を古方派と称したのに対して、後世方派と呼ばれます。
『啓迪集』は、道三医学の集大成として特に有名です。処方集としては、江戸期を通じて広く流通した『衆方規矩』が道三の著とされるほか、『授蒙聖功方』『出証配剤』などが伝わっています。『遐齢小児方』は日本初の独立した小児科医書として知られます。『鍼灸集要』も１６世紀の鍼灸書として出色の内容です。薬物書としては『薬性能毒』『宜禁本草』があります。養生書としては『養生誹諧』や『黄素妙論』があります。脈診や腹診にも専著があります。道三は広範な領域に精通した当代随一の医学者であり、それ以前日本史のなかで道三のような存在を見いだすことは困難です。

さらに道三は、専門医家に止まらない広い対象にまで医学知識を広めようとしました。生活習慣の改善によって庶民の病気予防、保健衛生をはかることは、単なる病気治療のレベルをこえた、医者のより高度な任務であると考えたからです。こうして、「ひらがな」表記や「五七五七七」の形式をとったものなど、医家のための専門書ではない平易な和文で書かれた養生書が執筆されました。伝統的な中国医学の理想である「上医は国を医し、中医は人を医し、下医は病を医す」という考え方を実践した、スケールの大きな医学者の姿をここに見ることができます。

師承関係：

道三の臨床医学の師である田代三喜（1465-1537）には、例えば『諸薬勢揃薬組之方』という著作をみれば、特異な作字による薬名表記があり、その薬名表記の約束を知らなければ理解できないように書かれています。その医学の独創性とともに、伝授によらなければ理解できない、その秘伝性をも示しています。

それに比べて、道三の医学は遥かに公開性の高いものでした。しかしながら、その著作はきちんと管理され、決して無制限に公開されてはいませんでした。すなわち、道三の門下では初学のための「切紙」から最高度の「啓迪集」まで九段階にわけて、主に道三の自著によるその修学の階梯が決められていました。弟子がその段階に達したと認めたときに、初めてそれに相応しい著述を学ぶことが許されるのです。まだ書籍の出版が殆ど行われていない時代のことですから、道三から許された弟子は、まず先生の著作を丁寧に書写し、更に先生の講義を聴いて漢文の読み方や細かな点を書き入れていったものと思います。こうして曲直瀬流においては、最新の中国医学の知識を、「察証弁治」と呼ばれる独自の医学理論によって体系化したばかりでなく、その高度で独自の医学理論を体系的に教育するこ

とに成功しました。その門人には、曲直瀬玄朔（この人は江戸時代には幕府の典薬頭という最高位の医家であった今大路家の祖です）・曲直瀬養安院（宇喜多秀家の妻を治療した褒美として、朝鮮出兵の戦利品として持ち帰った朝鮮版の医書を秀吉から賜った人物です）・施薬院全宗・秦宗巴らが輩出しました。

エピソードなど：

天正２年（1574）６８歳で完成した主著『啓迪集』は、正親町天皇のお脈を診るために命じられて参内した際に、天皇にご覧に入れたところ、天皇が当代一流の学者であった策彦周良にその序文を書かせるよう勅使を差し向けたこと、またこの時に道三の号である「雖知苦斎」に苦しいの「苦」の字があるのを避けて「翠竹」と改めるように勅命があったといわれています。

また永禄１０年（1567）９月、６１歳の時には、松永弾正久秀の求めに応じて大和国多聞城に久秀の側室の病気を治療した際、久秀の求めに応じて「養生一冊」「黄素妙論一巻」を著して講授し、更に当時京都で久秀を誹謗した５箇条の落首を書与えて、その所行を戒めました。「黄素妙論」は、いわゆる房中書（性生活に特化した養生書のこと）に属し、この種の医学書は中国古代では医学の重要な一ジャンルでしたが、宋代以降は急速に消滅していったらしく、道三の前後にこの種の専著は見られません。道三は、明・嘉靖刊の『素女妙論』という新刊書を読んでいたらしく、その内容を和訳して「黄素妙論」を作りました。「黄素妙論」は、道三が明の最新医学知識を幅広く貪欲に吸収したことを証明する著作です。その前年、永禄９年（1566）６０歳の時、中風にかかった毛利元就から依頼されて、その出雲の陣中に赴いて治療し、従学者のために陣中で講じた『雲陣夜話』もよく知られた著作で、翌年春、上洛した毛利元就に求められて９ヶ条の心得を書き与えています。この二つの話は、道三が権力者個人の保健衛生の相談にのったり、時には求められて諫言したりする人物であったことを示すものです。

そのほか、道三の名医ぶりを伝えるエピソードとしては、道三が脈診によって山崩れや津波といった天災地異を予知した説話が後世に伝わっています。道三が関東へ下向する途中に新井宿で一泊した時、宿の主人以下、奉公人の脈に災難に遭う脈証があったので、そのまま宿を発ったところ山崩れが起こったとか、またある浦を通りかかったときに血色の悪い漁師がいたので、その男の家に立ち寄ったところ、その家族の脈がいずれも死脈であった。そこで一家に勧めて山の方に逃れさせたところ津波が起こったという話があります。これらの話をすぐに事実と認めることは難しいものの、脈診の理論に精通した道三ならではの説話といえるでしょう。

そのほか、医学以外にも、香道・茶道・連歌などの諸芸に通じた文化人であったことが知られています。天正３年（1575）１０月１４日、６９歳の時、織田信長を私邸に迎え、正倉院に伝来した名香蘭奢待を信長から賜り、所持していた野洲井茶碗と鶉壷という名茶器を献上しています。また、天正１５年（1587）８１歳の時には、私邸に豊臣秀吉を迎え、

目黒達磨の掛け軸に桃尻の花瓶を飾り、名香を焚いてもてなしたといいます。茶道においては名物道具を所持し千利休らとも交流のある一流の茶人でありましたし、香道においても香木の鑑別において当代随一といわれた建部直勝と並ぶ存在でありました。また、連歌師里村紹巴に師事して、多くの誹諧作品を残しています。

医学知識、交流した人物、後世に及ぼした影響力など、そのいずれをとってもレベルの高さとスケールの大きさにおいて、曲直瀬道三は日本の医学史上、殆ど比肩する者がない傑出した存在であったといえます。